

大妻多摩中学校

二〇一七(平成29)年度

入学試験問題(第三回 4科型「I型」)

【国語】

時間 50分

2月4日(土)

【注意事項】

- 1 問題は19ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしてあります。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

次の文章は、福井県にある永平寺で坐禪ざぜんや食の作法といった修行をした筆者が、永平寺を出てからのことをつづった文章です。

最初はうまくいききました。まずは永平寺から師匠ししょうのお寺がある 注1出雲いずもまで歩いて帰ることにしました。一万円の所持金はすぐ底をつきましたが、「歩く」という明確な目的に向かって一生懸命やるだけです。気にせず進んでいるといういろいろな人たちが楽しそうに手をかしてくれました。

① ぶどうパンをくれたお兄さん、余った弁当をわけてくれたおじさん、温泉に連れていってくれたおじいさん……ただ歩いているだけ、①明日には去ってしまうこの身体を、笑顔で優しく支えてくれる人がいる。これは大きな発見でした。

社長をしているというある女性は

「私が一番落ち込んでいた時期に救いになったのは誰かのためになることだった」

と、苦労した過去を話してくれました。

② そんな人たちと接していると、こちらも見返りなく誰かに喜んでもらいたくなくなります。そう思い始めた途端とたんに「洗濯を手伝ってくれますか」とか「タケノコを掘ってきてくれるかい」などと道中触れ合う人たちが気軽に頼みごとをしてくれるようになりました。

③ 亡くなった妻にお経をあげてほしいと言ってくれた人もありました。私のような小僧こそうでよければと一生懸命読経よきやうしました。

こうやって誰もが喜んで誰かのために日々を生きることができたら、世界は大きく変わるはず。逆にこちらが御礼を言いたくなつたことを覚えています。

しかしその後、再び東京に赴き、家賃を払って生活するようになると、変化が現れました。④ まず永平寺では三年間ほとんどお金を使わず生活していたため、すべてがお金でまわる社会に大きな違和感を覚えます。だからといってどうしようもありません。最初は最低限のお金は必要かと思つて、お金のためにいろいろなアルバイトをしました。

ところがそのうちに「家賃は、光熱費は、生活に必要な最低限のお金は……」と少しずつ対価を意識するようになり、誰かのためになることを何でも見返りなくやろうと思つていたはずが、いつの間にかお金になる仕事を優先させるようになりました。

自分の生活に本当に必要なものは何なのか見極めることができず、気づくと生活が乱れていました。あるとき、食べていくことへの不安を解消するために自分がお金に依存していることを認め、それをやめることにしました。

ただしそれを絶対的な規範として、公言するのもなんだか違います。⑤

たとえば、みんなが使っているお金を「使わない」と口に出してしまうと、お金を使っている人は気分よく使うことはできないでしょう。そもそもお金を言葉に挙げる時点でお金にとらわれていることとなります。そこで「自分がお金を使わないこと」よりも、「お金にとらわれない永平寺の生活」を真似することに焦点を当てるようにしました。

もしお金を渡された時は有り難く頂き、自分からは一切要求しないことに決めました。手元にお金がなくなったら確かに困るかもしれませんが、その時はその時です。それだけのことですが、その覚悟を決めた途端に、やるべきこと、生き方がはつきり決まった⑥ ような気がします。こうしてお金のためにやっていた仕事をやめていくと、生活に変化が起きました。

永平寺から下りて一年が経とうとしたちようどその頃、学生時代から実の兄のように慕っている人に食事に誘われました。なんでも以前何人かで一緒に食事をした時に私の食べ方があまりに清々しかったことが話題になり、その秘密を知りたいというのです。

相手に気づかせない⑦ が作法のよいところですが、清々しいと思われるようではいけないと思いつつ、頼りにしている兄貴分にそう言われたことが嬉しく、永平寺の食の話をしました。彼はその後、二度も一緒に永平寺に来てくれ、これは世界に広めるべき

だと、禅寺の食の作法をまとめて発信することを提案してくれました。彼のおかげで、私はより気をつけて作法を実践するようになりました。

⑧

東京に住み始めて三年が経った頃、学生時代の友人たちに誘われて、男三人で一軒家を借りて住むようになりました。衣食住を誰かとシェアすると、驚くほどお金がかからなくなります。その上、^⑨同じ屋根の下で一緒に生活すると家族のようなつながりが生まれることに気づきました。

私は四畳ほどの屋根裏部屋に暮らしていましたが、狭いとは一度も感じませんでした。近所の銭湯、パン屋さん、酒屋さんが自分の家の一部のように大切に思え、むしろ家の感覚は広がりました。そのうち家族のような感覚でつきあう近所の人が次々に広がり、街全体が住み慣れた家のように感じられると、ますますお金を使う必要がなくなってきました。

お金を中心につながっていたのが、それを取り除くことによって日常のあたりまえのことから生まれる人と人とのつながりが強まってきたのです。

永平寺の山門はいつでもあけはなたれ、そこには「たとえ小さな子供でも志があれば入門を許すが、どんなに社会的な地位があっても志がなければ入ることはできない」という家風が刻まれています。百人いても家族と同じようにお互いを想い、尊重する作法でつながっているひとつの家です。私は永平寺と一緒に修行した仲間を家族や兄弟のように大切に思っています。それは食を共有していたからだと思います。

(星寛『お坊さんにまなぶ こころが調う食の作法』『デイスカヴァー・トゥエンティワン』より)

注1 出雲……島根県東部の昔の呼び名。

2 娑婆……仏教の言葉で、人間が住んでいるこの世界。

3 家風……その家のならわし。

注2 娑婆で永平寺の食事

問1 — 線部①「明日には去ってしまうこの身体」とは、どういうことですか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 明日には死んでしまうかもしれない私。
- イ 明日にはこの場所から立ち去ってしまう私。
- ウ 明日には私のもとからいなくなってしまうあなた。
- エ 明日にはこの世から去ってしまうかもしれない人間。

問2 — 線部②「見返りなく」、⑤「公言する」の意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ②「見返りなく」
 - ア 振り向くことなく
 - イ 面倒くさがらず
 - ウ 対価を求めず
 - エ ひたすら熱心に
- ⑤「公言する」
 - ア 立派な人が話をする
 - イ 人前で隠さず堂々と言う
 - ウ 私的ではない場所で話す
 - エ 多くの人々の耳に入るように言う

問3 — 線部③「私のような小僧でよければ」からは筆者のどのような気持ちを読み取れますか。その気持ちとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 謙遜けんそん イ 自負じふ ウ 僻みひが エ 親切しんせつ

問4 — 線部④「変化が現れました」とありますが、その変化として**適切でないもの**を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア お金になる仕事を優先させるようになってきたこと。
イ 自分の生活に本当に必要なものを見極めることができなくなったこと。
ウ 自分がお金に依存していることを認め、それをやめることにしたこと。
エ 誰かのためになることを何でもやろうと思っていた気持ちが弱くなってきたこと。

問5 — 線部⑥「やるべきこと、生き方がはつきり決まったような気がします」とありますが、この生き方とはどのようなものだと考えられますか。ここまでの内容を踏まえて四十字以内で説明しなさい。

問6 ⑦ に入れるのに最も適切な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 曖昧さわいまいさ イ さりげなさ ウ うれしさ エ 完璧さかんぺきさ

問7

⑧

には、次の四つの文が入ります。正しい順序に並べ替え、記号で答えなさい。

ア 勿論、応援してくれる人ばかりではありません。

イ 手放すとやってきて、依存しようとするのと離れていく何かは恋のようです。

ウ このように覚悟を決めるたびに不思議と協力してくれる人が現れます。

エ 努力をせずに最初から助けを求め期待する気持ちはどこかがあると親切な人は探しても現れません。

問8

——線部⑨「同じ屋根の下で一緒に生活する」とありますが、この場合、具体的にはどのようなことですか。それを表した言葉を、——線部⑩以降の本文中から、「ということ。」につながるように八字で抜き出して答えなさい。

問9

食の作法は、なぜ私たちに必要だとあなたは考えますか。百字以内で書きなさい。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、本文中の表記は原文のままにしています。字数制限のある問題は、句読点やカギカッコも一字と数えること。

三年生になるときのクラス替えで同じクラスになったヤンチャ、ハム太、ノリタ、そしてワタル。四人は意気投合し、悪さをするのも見つかって叱られるのも一緒だった。その中で一番わんぱくで、近所でその名前を知らない者はいなかったヤンチャが原因不明の病気で緊急入院してしまう。病院に見舞いに行ったハム太、ノリタ、そしてワタルはすっかり衰弱してしまったヤンチャを見て大きなショックを受けたのだった。

うちに帰る間じゅう、僕はほとんど口をきかなかった。

土手の上を歩いていく間に、夕日が僕らの背丈と同じくらいのところまで沈んできた。

見おろすと、川も、スキの原っぱも、遠くの橋も、そこを渡っていく車も、ありとあらゆるものが真っ赤に染まっていた。世界中が血を浴びたみたいだった。

①半ズボンの裾すそから、すきま風がびゅうびゅう通って背中へ抜けていく。この帰り道をいつでも一緒に歩いていたヤンチャがいないなんて、なんだかとても変、というか、理屈に合わない感じがした。奥歯が一本抜けてしまったようで、どうにもうまく力が入らないのだ。

土手の道を町のほうへおり、もうすぐ家、という頃になって、僕はふとつぶやいた。

「タイムマシンがあればいいのにな」

頭に浮かんでいたのは『ドラえもん』の一場面だった。

「なんだよ、いきなり」

と、ハム太。

「だってさ。タイムマシンさえあれば、十年でも二十年でも先の世界へ行つてこられるわけだろ？」考え考え、僕は言った。「それぐらい先の世界ならきつと、今よりずっと進歩してるんじゃないかと思つてさ。ヤンチャの病気なんか、ただの風邪みたいに簡単に治せるようになってるかもしれないじゃないか」

「バツカじゃねえの」見下したようにハム太は言った。「そんな先の世界でヤンチャの病気が治せたって意味ないじゃん。ヤンチャが病気になつてるのは今なんだぜ、バカ」

そのとたん、

「バカはお前だ」

ノリオがまたしてもハム太の頭をこづいた。

「ワタルが言っているのはなあ、もしタイムマシンがあつたら、未来の世界からヤンチャを治せる医者を連れてくることだってできるし、反対にヤンチャを未来へ連れて行つて治してもらうことだってできるってことなんだよ。そうだろ、ワタル」

僕はうなずいた。さすがはノリオだ。

「だあけどさあ」ハム太が頭をさすりながら言った。「ジツサイモンダイとして、タイムマシンなんてありっこないじゃないかよ。そんなのが本当にあつたら、病気で死ぬ人なんて今ごろ一人もいないはずだろ」

たしかにその通りだった。実際問題として、今のこの世界にタイムマシンなんてものは存在しない。いつもの僕の〈クウソウヘキ〉は、現実から逃げ出すには好都合だけれど、^② 現実に立ち向かうためにはまったく役に立たないのだ。

僕は肩を落として別れた。

0点のテストを返されて家に帰る時より、はるかに気が

③。

それから一週間ほどが過ぎた朝のことだ。

学校に着いた僕を、めずらしく先に来ていたハム太が、二階の廊下の窓から身を乗り出して、「おーい」と手招きした。

上履きのかかとを踏んだまま階段を一段抜きで駆けあがると、まだ生徒の半分も来ていない教室で、ノリオとハム太は机にかがみ

こんで何かの本を読んでいた。

そばまで行って横からのぞき込む。窓を背に立っていたハム太がちょっと左へずれただけで、白いページに反射していた朝日がさえぎられて読みやすくなった。でかい図体ずうたいでも、こんな時ばかりは役に立つ。

「何、その本」

と訊きくと、ノリオはページの真ん中へんを指さした。

「……『それじゃ博士は、この方法で本当にあれを作り出すことができるっておっしゃるんですね？』」
声を出して読んでみたけれど、さっぱりわからない。

「何だよ、あれって」

すると、ノリオは、ちらりと僕を見あげて言った。「タイムマシン」

「えっ？ なに？」

「タイムマシン」

ぽかんとしている僕に、

「オレが見つけたんだからな」と、ハム太は自慢げにおっぱいを、もとい、胸をつき出してみせた。「図書室で借りた本なんだけどさ、あぶなく読まないで返しちゃうとこだったよ」

「お前らしいよな」とノリオ。「だいたい、返却日なんかとつくに過ぎてるぜ」

「細かいこと言うなって。なくすよりかマシだろ？」

ハム太の言葉に、僕は首をすくめて小さくなった。いつものごとくぼんやりしていて、せっかく借りた本をどこかに忘れてきてしまった前科があるのだ。

「で、この本読んだの？」急いで話を変える。「どうだった？」

「おもしろかった」

とハム太。

「そうじゃなくてさ、タイムマシンの作り方だよ。使えそうなの？」

「あのなあ、ワタル」あきれ返ったようにノリオが言った。「これは、SFだぜ？ ほら前に観たる、『E.T.』って映画。あれみたいなもんさ」

「どういうこと？」

「つまり、ありそうだけど絶対ありっこない話、ってこと」

「そうそう、ただの作り話」ハム太までが調子に乗る。「こんなの本気にしちゃうバカなんて、世界中でお前くらいだろうなあ」

「どうせバカだよ」と、僕は言った。「だけど、ほんとに作り話だと思ふんなら、どうしてわざわざ持ってきて見せたりするのさ」

「こないだタイムマシンの話が出たからにきまつてるだろ」とハム太は言った。「見せたらお前らが面白がるかなと思って」

④
「……………」

がっかりした。というか、正直、ものすごく傷ついた。信じていた相手からいきなり足を引っかけられて転ばされて、おまけに指さして笑われているみたいなの、いやな気分だった。

あの土手の道でタイムマシンのことを話した時、僕は心の底から真剣だったのだ。そんなものがこの世に存在しないということくらい、もちろんわかってはいたけれど、それでもまあ、どこかにあってくれたらと祈らずにいらなかった。その気持ちだけはきっと、ノリオもハム太も同じだと思っていた。なのに……。

その日一日じゅう、僕は二人と口をきいてやらなかった。

放課後、それでもなんとなく連れだつて病院へ行くと、ヤンチャは僕らを見るなり言った。

「どうしたんだよ、お前ら。何かあったのか？」

「ないよ」

「何にも」

ノリオとハム太の聲がぴたりとそろって、な、と同時に僕の顔を見る。

「……うん。ない」

と、僕も言った。ヤンチャによけいな心配をかけたくなかったのだ。

でも、ヤンチャは全部お見通しだった。

「また下らないことでケンカでもしたんだろ」

「ケンカじゃないよ！ それに下らないことなんかじゃない！」

言ってから「あ」と口を押さえたけれど、後の祭りだった。

「へへ、自分からばらしてやんの」

と言ったハム太の脇腹わきばらを、ノリオがひじでこづく。

「ケンカじゃないなら、何だよ」

ヤンチャは、落ちくぼんだ目で僕らを順番に見つめた。まるで、どこかの国の飢えた子供みたいな目だ。

「なあ、何だよ」

僕らは顔を見合わせた。

それから、仕方なく話しだした。この間の土手の道での話から、今朝の本の一件に至るまで、洗いざらい、順番にだ。

ときどき咳をしたり、目を閉じたりしながら耳を傾けていたヤンチャは、全部聞き終わると意外なことを言った。

「オレもさ。読んだことあるよ、その本」

「えっ、ほんとに？」

「うん、背表紙の赤いやつだろ。なんかちょっとあぶない博士の作った機械に入って、江戸時代に旅したはいいけど、その時代にはないはずのそいつらが現れたせいで歴史が微妙に狂っちゃってさ。もとの世界に戻れなくなっちゃうやつ……」

「それそれ！」

興奮したハム太が大きな声を出して、病室の前を通った看護婦さんにシートと注意された。

「それだよ、それ」慌てて声をひそめる。「そいでさ、やっと戻ってきたと思ったらさ、今度は機械の故障で未来に飛ばされて、みんなに原始人扱いされちゃってさ」

ヤンチャはうなずいて、何を思いだしたのか、おかしそうに笑った。

「けっこう面白かったよな、あの本。タイムマシンを作っていく手順が詳しく説明してあったる。使う材料とか、組み立てるコツとかさ。オレ、あの一番最後にみんなで叫ぶところ……ええと、何だったっけ？」

ハム太が答えた。

『発進！ 僕らのタイムマシン！』だろ」

「そうそう。オレ、あそこんところが好きだったな。なんかこう、スカッとしてさ。そういえば、前にテレビで言ってたけど、タイムトラベルって理屈の上ではほんとに可能なんだってよ。嘘かほんとか知らないけど」

僕らはベッドの横に立って、ヤンチャの顔を見下ろしていた。^⑤ヤンチャのこんなに楽しそうな顔を見るのは久しぶりだというのに、なぜだか胸が苦しかった。

「タイムマシン、かあ……」

うっとりとした満足げな表情を浮かべて、ヤンチャはつぶやいた。

いつだったろう、ちよつと前にも同じ顔を見た気がする。そう思って、すぐに思い出した。夏休み、学校のプールの帰りに、四人でアイスを買って神社の境内でこっそり食べた時と同じ顔だ。あの時ヤンチャはまだ元気だった。あれは、ついこの前のことだったはずなのに……。

「そうだ」急にヤンチャが目を開けた。「^⑥お前らさあ。作ってみるよ、タイムマシン」

「ええっ？」

僕らはそろって、へんな声を出した。

「無理だよ、そんなの」

と僕。

「大丈夫、できるって。だいたいの作り方は、あの本に書いてあるんだからさ」

「だけどヤンチャ、ええと、わかってるよな？」と、ノリオが不安げに言った。「あんなの真似して作ったって、本物のタイムマシンなんかできっこないぜ？」

「そうだよ、いったいどうしちゃったんだよ」とハム太。「いきなり変なこと言い出したりしてさ。ワタルじゃあるまいし」カチンときた。よつぼどノリオがするみたいにこづいてやろうかと思ったほどだ。

でも、ヤンチャはふつと寂しそうな顔になって笑った。

「いいんだよ、本物じゃなくなたって」と、ヤンチャは言った。「あれが作り話だってことくらい、もちろんわかっている。でもさ、なんか面白いじゃん。オレはこんなだから、お前らと一緒に作ることはできないけど、お前らから話を聞くだけでも、なんか、楽しそうじゃん」

僕らは顔を見合わせた。ノリオの顔にも、ハム太の顔にも、そっくり同じ戸惑いが浮かんでいる。

「なあ、作ってみろって」とヤンチャは言った。「お前らならきつと、けっこうすごいのができると思うぜ？ ノリオは頭いいしさ、ハム太はプラモとかラジコン組み立てるのうまいしさ。ワタルだってほら、あの本に書いてないことがあっても想像力でカバーできそうだし。それに……」

口ごもったヤンチャの顔を、僕らは見つめた。

「それに、もしかしてもしかしたら……その、ついうっかり本物ができちゃうことだってさ、絶対ないとはいえないだろ？ そりゃ可能性としては、○・○○○○○パーセントくらいかもしれないけど、^⑦すっごく偶然がいくつも重なったら、もしかしてさ」

言いながらヤンチャは、自分で自分の言っていることが照れくさくなったのか、くしゃくしゃと顔をゆがめて笑った。

「な、作れよ、お前ら。それで、できあがったらオレを一番に乗っけてくれよ」

学校の帰りに通る土手を、家のほうに下りないでそのままずっと歩いていくと、ススキだらけの原っぱのはずれに、使われていない倉庫がある。はずれたままの裏口のドアからは自由に入れるし、中には鉄パイプや板きれなんか置きっぱなしになっている。

〈中略〉

僕はその倉庫を、〈秘密基地〉と呼ぶことにした。

⑧ ヤンチャと約束を交わして以来、三人とも、これから作ろうとしているタイムマシンが本物かどうかなんてことをわざわざ話題に
しなくなった。ヤンチャがああして一緒に面白がつてくれるなら——葉臭いベッドで寝ているしかないヤンチャが、ほんの少しでも
元気を出してくれるなら、タイムマシンが本物だろうがニセ物だろうが、そんなことはどうでもよかったのだ。

とはいえ、僕らはお互いになんともわかっていなかった。あのヤンチャの言葉を信じたがつているのが、自分だけではないということ
を。

〈〇・〇〇〇〇〇〇パーセントの可能性〉

たとえそれがバカげた夢物語に過ぎないとしても、最初から何もかもあきらめてしまったら、〇・〇〇〇〇〇〇パーセントはたち
まち完全な0ぜろになってしまう。すべてをあきらめたやつのもとに、奇跡は起こらない。

『短編工場』所収 村山由佳「約束」〔集英社文庫〕より

問1 — 線部①「半ズボンの裾から、すきま風がびゅうびゅう通って背中へ抜けていく」とありますが、この時の「僕」の気持ち

の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちのリーダーでもあったヤンチャが突然病気になるってしまい、自分たちとは違った世界に行ってしまったような違和感。

イ 自分の意見を強く主張するのが得意だったヤンチャが病気になる、自分の気持ちを全く話さなくなってしまったことへの嫌悪感。

ウ 病気になるって弱気になってしまったヤンチャを、病気をしたことがない僕たちはもはや元気づけることはできないと悟ってしまった絶望感。

エ 活発でいつも一緒に遊んでいたヤンチャが、こともあろうに病気になるってしまい、日々の行動を共にすることができなくなってしまったことへの喪失感。

問2 — 線部②「現実に向かう」とは具体的にどのようなことですか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア タイムマシンを作ること。

イ ヤンチャの病気を治すこと。

ウ ヤンチャを未来に連れて行くこと。

エ 病気で死ぬ人を一人もない状態にすること。

問3 ③ に入れるのに最も適切な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 利きいた **イ** 多おほかった **ウ** 長ながかった **エ** 重おもかった

問4 ——線部④「……………」とありますが、この時の「僕」の気持ちを説明したものととして最も適切なものを、次の中から一つ選

び、記号で答えなさい。

ア ヤンチャへの友情をないがしろにただけではなく、「僕」のヤンチャへの気持ちをもてあそんだことに対して怒っている。

イ ヤンチャと再び一緒に遊びたいと願う「僕」の気持ち理解されなかっただけでなく、非常識であると指摘され、苦悩している。

ウ 何とかヤンチャを元気にしたいという「僕」の友だちを思う真剣な気持ちを共有できなかったばかりでなく、馬鹿にされ、落胆している。

エ 何とか四人でタイムマシンを作り上げたいという「僕」の気持ちを無視したばかりでなく、自己中心的であると非難され、悲しんでいる。

問5 ——線部⑤「ヤンチャのこんなに楽しそうな顔を見るのは久しぶりだ」とありますが、「ヤンチャ」が「楽しそう」だったのは

なぜだと考えられますか。その理由として適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 元気だった頃に読んだ本について友だちと話題を共有することができ、元気になったらやりたいことがはつきりとしてきたから。

イ タイムマシンを理論上作ることが可能であることを思い出し、何の希望も見いだせなかった自分の人生に少し希望が持てたから。

ウ 元気だった頃に読んだ本についてみんなと話をすることで、病気を忘れ、元気だった頃の自分に戻ったような気持ちになれたから。

エ 友だちや学校から切り離された生活ではあるが、見舞いに来てくれた友だちの元気のある姿に触れ、生きる意欲がわいてきたから。

オ タイムマシンの小説が病気になる前の自分の生活と一致していたことに気がつき、何気ない日常の一コマこそが大切であると気がついたから。

問6 — 線部⑥「お前らさあ。作ってみるよ、タイムマシン」とありますが、この「ヤンチャ」の言葉によって、ワタルたちにと

のような思いが生まれてきたと考えられますか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現実ではあり得ないおもちゃのタイムマシンでも、完成したらヤンチャの病気を治すために利用できるかもしれない。

イ 本物のタイムマシンを完成させるというほとんどゼロに近い可能性でもヤンチャの生きる希望につながるかもしれない。

ウ 夢物語にすぎないタイムマシンをヤンチャのために製作しているふりをするので、ヤンチャが納得するかもしれない。

エ ヤンチャのためにタイムマシンを完成させるという使命が、これまでの四人の友情をなお一層強めることになるかもしれない。

問7 — 線部⑦「すっごい偶然がいくつも重なったら」とありますが、このような状況に最も近い意味の四字熟語として適切なもの

のを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア** 千載一遇 **イ** 一喜一憂 **ウ** 五里霧中 **エ** 晴耕雨読

問8 — 線部⑧「ヤンチャと約束を交わして以来、三人とも、これから作ろうとしているタイムマシンが本物かどうかなんてこと

をわざわざ話題にしなくなった」とありますが、ワタル、ハム太、ノリオたちが自分たちが作ろうとしているタイムマシンが本

物かどうかを話題にしなくなったのはなぜですか。その理由を説明している次の一文の に入る言葉を、それぞ

れ二十字以内で答えなさい。

ワタルたちは ということはわかっているが、ヤンチャのためには ということが大事で

あると考えたから。

問9 本文の内容や表現の説明として最も適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア** 会話を多く使って、小学生の男子の行動や思いを生き生きと描き出している。
- イ** ひらがなを多く使うことによって、登場人物の少年たちの未熟な部分がより強調されている。
- ウ** 雄大な光景を細かく描写することによって、自然と共に生きる少年たちの日常を生き生きと伝えている。
- エ** 登場人物のそれぞれの思いを丁寧に追っていくことによって、複雑な人間関係を読者にわかりやすく示している。
- オ** ワタルのヤンチャへの思いを中心に描き、その描写を通して、多感な少年が「生」について揺れ動く思いを描き出している。

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 宇宙開発にタズサわる。
- ② 訪れたタイザイ先で勇気をもらおう。
- ③ 海でソウギヨウしている漁船と連絡を取る。
- ④ ボウサイの日に避難訓練をする。
- ⑤ コウシキユニフォームを身につける。

問2 次の各文の——線部の読み方を、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 密かな思いを抱く。
- ② 日々の営みを大切にする。
- ③ 大きく弾むボール。
- ④ 患者の負担を和らげる。
- ⑤ 入り口に募金箱を設ける。

以下余白

